

## 続・新課程高校地理における評価のあり方とテスト

近畿大学教職教育部助教授 戸井田 克己

本稿は前稿（本誌2002年12月号）<sup>1)</sup>の続編である。前稿では「そもそも評価とは何か」という根源な問いについて検討したあと、これを受け、観点別評価の必要性、ノート提出のあり方、テスト問題の工夫改善等の問題について言及した。本稿ではこれらのうち、さらに具体的に論じることが必要な観点別評価の問題に絞って検討を加える。

### 地理教育における4つの評価観点(評価規準)

前稿では地理教育のねらいとして、学び方を学ぶ、思考力を伸ばす、地理的技能を身につける、地理的見方・考え方を培うという4点を挙げたが、さらに検討の結果、「技能を身につける」「用語・地名知識を増やす」「空間認識を広げる・深める」「思考力を伸ばす」の4つに精選・再編し、この順に配列することとした（表1）。この順序は、「地理的見方・考え方を培う」という地理学習の大きな目標を達成するための一つの典型的な「指

導の流れ」を想定し配列したものである。

すなわち、実際の学習指導場面を考えた場合、まず何らかの地理的技能を身につけ(表の①)、それと並行して地理的な知識を増やしつつ(②)、それらの上に乗って空間認識を拡張しながら(③)、地理的な思考力を養っていく(④)、というのが一つの指導モデルとなるであろう。表1では、そうした指導の流れ(授業展開)から抽出した①～④のねらいをそのまま「評価の観点(評価規準)」に置き換えている。

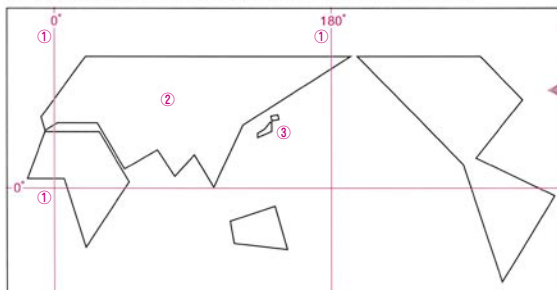
なお、評価の「規準」(criterion)とは、「何を評価するか」といった質的な判断対象のことである。「観点」と言い換えることができるものである。年間の、あるいは単元レベル(学習指導要領の中項目レベル)の、あるまとまりをもった学習指導場面では、これらの観点(規準)を明確にして指導計画を練る(評価目標を立てる)ことが大切であろう。

表1 新課程高校地理における評価

学習内容		評価基準	評価の観点 (評価規準)			
学習指導要領の中項目	実際の学習指導場面		①技能を身につける	②用語・地名知識を増やす	③空間認識を広げる・深める	④思考力を伸ばす
<b>地理 A</b> (1)ーア 球面上の世界と地域構成	●日本を中心にした世界地図の略図(メルカトル図)をフリーハンドで描かせ、各国の位置関係や方位、時差等についての理解を深めさせるとともに、世界地図をおおまかなレベルでメンタル化させようとする場面。	具体的な指導・評価目標	●世界地図に薄紙をあて、海岸線を繰り返し返しなぞるなどして、地図を見ないでもおおまかな世界地図が描けるようになる。 ●そこに、赤道、本初子午線、日付変更線を書き込むことができる。	●描きあげた略地図に核となる経緯線(40°N、23.5°N、135°E、60°E、100°W)のおよその位置を書き込むことができる。 ●同様に、特徴的な国(アメリカ合衆国、チリ、インド、スペイン、南アフリカ共和国、オーストラリア)を書き込むことができる。	●北半球と南半球、東半球と西半球における水陸分布の偏りをおおまかに把握できる。 ●東京中心の正距方位図や地球儀と対比し、日本を基準に見た方位と距離に関する正しい基本認識がもてる。	●球体である地球では、日の出・日没などの時刻が刻々とずれていくが、そのさまを感覚的・実感的に理解できる。 ●標準時の必要性が理解でき、経度の違いによる時差の考え方について正しく認識できる。
		(C) 努力を要する	●海岸線の細部に気を取られすぎたり、なぞること自体に集中するあまり、全体が大観できず、その結果、いざフリーハンドで描く段になると、大陸の大きさや位置関係が大ききゆがんだ地図しか描けない。	●地図を見なければ、核となる経緯線や上記6か国が半分程度しか書き込めない。 ●地図帳で調べても、すべて書き込むのにかなりの時間を要する。	●平面図(略地図)で見た水陸の偏りは把握できるものの、球面(地球儀)と平面(世界地図)の表現法の違いが理解できず、その結果、位置関係や距離の大小に関する認識が混乱している。	●地球の自転が時差に関係することは理解しているが、その原理をグローバルに大観し、整理できるまでにはいたっていない。 ●たとえば、東京ーロンドン間の時差については理解できるが、東京ーホノルル間など日付変更線をまたぐ時差になると混乱する。
		(B) 概ね満足できる	●元図を見ず、フリーハンドで資料1の図(i)程度のおおまかな世界地図が描ける。(必ずしも図(ii)のようなより詳細な地図が描けなくてもよい。)	●地図を見なければ、書き込めないものが複数ある。 ●地図帳を利用すれば、比較的短時間ですべて正確に書き込むことができる。	●略地図に書き込んだ6つの国のうち、「東京から真東に進んだとき、最初に到達するのはどこか」「真北に進んだ場合はどうか」などの問いに答えられ、地球儀や正距方位図を使ってその考え方を説明できる。	●時差のメカニズムを十分に理解しており、日付変更線の意義についてもよく認識している。 ●静止した都市間の時差問題についてはほぼ完璧に解答できる。
(A) 十分に満足できる	●資料1の図(i)程度の世界地図が描けるだけでなく、大陸や国のスケールでも自ら練習しようとし、より詳細なメンタルマップを獲得しようとする。	●地図を見なくても、すべてを概ね正確に書き込むことができる。 ●平時の授業ノートの内容を、独自に略地図を描いて整理しようとし、またそれができる。	●方位や距離に関して正しい認識がもてるだけでなく、メルカトル図と正距方位図がもつ長所・短所についても比較して考察できる。 ●経度や水陸分布の違いが、気候環境の多様性を生じさせていることを理解できる。	●自らの移動を伴うやや複雑な都市間の時差問題についてもほぼ完璧に解答でき、「時差ボケ」が生じる原理を仮想的・実感的に認識できる。 ●サマータイムの意義を考え、日本がそれを導入した場合の長所・短所を検討できる。		
<b>地理 B</b> (3)ーア 地図化してとらえる現代世界の諸課題	●地図化することの意義に気づかせ、より有益な作図のあり方について考えさせるとともに、自ら作成した地図がもつ地理情報を読み取らせようとする場面。	具体的な指導・評価目標	●たとえば「都道府県別人口密度」を表した数値情報をもとに、階級区分図を作成させる。 ●その際、階級の数、その境界値、図の彩色などを工夫することが、より有益な地図を作成する決め手となることを試行錯誤のなかで理解できる。 (「新詳地理B 最新版」p.239参照)	●「都道府県別人口密度図」の作図に加え、たとえばアメリカ合衆国の「州別人種民族構成」を表した階級区分図を作成させる。 ●これらの作業を通し、県やおもな州の名称や、位置関係を理解させるとともに、ロッキー山脈、アパラチア山脈、ミシシッピ川、リオグランデ川、カリブ海、メキシコなど、主要な用語・地名知識の定着を図る。	●作成された図の分布特性を的確に読み取ることができる。 ●また、南北・東西といった位置関係、山脈・河川といった自然環境、交通・産業といった人文現象などに着目し、それらとのかねあひから相互の関係を客観的に説明することができる(相関関係の説明)。	●なぜそのような分布特性を示すかについて考察し、一定の解釈を示すことができる。 ●その際、歴史的経緯に注目したり、他の要因(位置、自然、人文など)に関わる情報を地図化して図を重ね合わせたりして、ある現象が生じている背景を因果的に説明することができる(因果関係の説明)。

資料1 略地図を描く

1 まずは大陸の形と位置をおおまかにとらえてみよう。

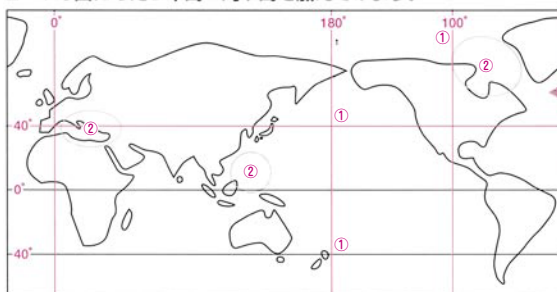


(i) 大まかにとらえた世界地図の例

描くポイント

- ① 大陸の位置を示す基準として、赤道と0度・180度の経線を示す。
- ② 大陸の形は、直線を用いた単純な形に略す。
- ③ 六大陸以外は省略する。ただし、日本は例外的に加え、世界の位置関係を把握するためのめやすにする。

2 1の図にめだつ半島・湾や島を加えてみよう。



(ii) 半島・湾や島を加えた略地図の例

描くポイント

- ① 基準となる緯線・経線の数を増やす。
- ② 入り組んだ湾や小さな島は省略する。

各々についての評価基準(評価の段階)

評価の観点(評価基準)が定まったら、その各々について「評価基準(評価の段階)」をあらかじめ設定しておくことが必要になろう。ここでいう評価の「基準」(standard)とは、日本語で見ると「規準」(criterion)とたいそうまぎらわしいが、「どの程度達成されたか」といった量的な判断根拠のことであって、「段階」と言い換えることができるものである。一人ひとりの学習者の努力や達成度をより丹念に評価しようとするなら、単に「できた／できない」の○×式評価ではなく、「どの程度できたか／課題は何か」といったことが生徒にも、また教師自身にもわかるA・B・Cや、5・4・3・2・1などといった評価基準(段階)の設定が必要であろう。

新課程への移行に際し、地理A・Bすべての中項目に関して「評価の観点」と「評価基準」を提示するのが望ましいが、紙幅の制約もあり、今回新たに取り入れられた重要項目のうちの一部を例示するにとどめた(表1)。また、地理Aの「球面上の世界と地域構成」については一応表を網羅したものの、地理Bの「地図化してとらえる現代世界の諸課題」については評価の観点のみを例示した。これらの観点や基準については生徒の能力や適性によっても一様ではないし、教師の教育理念によっても流動的であろう。

このひな形をたたき台に、独自の規準と段階を創り上げていきたいものである。

なお、より体系的に評価規準(基準)を検討した資料として、北尾倫彦・祇園全禄編(2002)<sup>2)</sup>、帝国書院資料編集部(2001)<sup>3)</sup>などがある。いずれも中学校社会科(地理的分野)に関して具体的な規準(基準)を設定したもののだが、新課程高校地理においても参考になるであろう。

注

- 1) 戸井田克己「新課程高校地理における評価のあり方とテスト」(「地理・地図資料」144 2002年12月 帝国書院)
- 2) 北尾倫彦・祇園全禄 編『[平成14年版] 新観点別学習状況の評価基準表中学校・社会-単元の評価規準とABC判定基準-』図書文化社 2002
- 3) 帝国書院資料編集部『社会科 中学生の地理 最新版 観点別評価資料』帝国書院 2001